1　祭礼の比較検討

～京都祇園祭、田名部祭り、野辺地祇園祭、青森ねぶた祭～

青森公立大学　地域みらい学科　教授
佐々木　てる

はじめに

本論稿は学術文化振興財団助成金事業、青森公立大学地域研究センタープロジェクト事業である、「祭礼を通じたコミュニティ形成の比較社会学的研究：ねぶた祭と祇園祭を題材として」の成果報告である。本事業を行うにあたり、次のような事業目的をたてた。

「本格的に人口減少を迎えている青森県において、これまで以上にコミュニティの崩壊がすすむ可能性がある。しかしながら、ここ数年の調査により青森ねぶた祭が一つの文化的・社会的資源となって、人を地域に繋ぐ役割、すなわちコミュニティ形成の役割を担っていることが分かってきた。そこで、同様な都市ぐるみの祭礼とねぶた祭を比較し、それがコミュニティ形成にどのような役割を担っているか、明らかにしていくことを目的としている。特に今回は日本でも代表的な祭礼といえる、京都祇園祭を取り上げ、そこと青森のねぶた祭りを比較することにより、祭礼を通じたコミュニティ形成の在り方、問題点、利点などを明らかにしていくことにする。また祇園祭で成功している点などを明確にし、青森のねぶた祭に生かすことができないか分析していく。特に祭の担い手の育成や、市民の祭への動員などを調査する予定である」。

この事業目的に基づき、京都祇園祭の調査を行った。同時に祇園祭の流れをくむ、青森県の下北地方の「田名部神社例大祭（以下田名部祭りとする）」と「野辺地祇園祭」の二つの祭にも足を運んだ。これら三つの祭と青森ねぶた祭を比較した結果、主に次の点を論点とし分析することとなった。すなわち①伝統的な文化の継承の方式とそれを支える人々のかかわりはいかなるものであるのか、②地域にとって観光資源としての祭とはどのようなものであるのかという点である。①に関しては、祭りを支える人脈やネットワーク、祭りを楽しむ人、当日主体となって動く人々などいくつかの視点にわけることができるだろう。調査を通じて、人々のネットワークや動員、工夫などが明らかになった。この点については、「2　祭礼の歴史文化の継承」で特に扱っている。また②に関しては、伝統文化を重んじつつも、地域資源として祭りを資料し、それを観光資源に結びつける戦略について考えるという視点が重要であった。特に祇園祭は1000年以上続く祭であり、さまざまな工夫がなされていた。具体的には「3　祭礼比較から学ぶ新しい観光戦略」を参照してほしい。

本報告論文では、調査の概要およびおおまかな分析結果について述べていくことにする。

1　調査概要

まず本調査において祇園祭を選定した理由としては①日本を代表する祭であり、歴史も長くその文化継承の方法は学ぶ点が多いと考えこと。②開催期間が長い（一か月）ため調査を行いやすいこと。③祇園祭においては山鉾巡行が行われるが、そこにかかわる集団として「山鉾保存会」「囃子方」「作事方」「曳手」があり、この構成要素がねぶた祭の組織と比較可能であること、などが指摘できる。また先に述べたが、祇園祭の流れをくむ田名部祭りをさらに比較対象に入れることで、青森の風土と祭り文化の考察がさらに深まると考えた。

さて本調査は青森公立大学地域みらい学科､佐々木ゼミ 2 年生のゼミ活動と兼ねている。そのため事前学習を含め、下記のような調査スケジュールで調査が行われた。

4 月～6 月：京都祇園祭に関する事前勉強
　　米山俊直 1974『祇園祭　～都市人類学ことはじめ～』中央公論社
　　他、文献研究　調査地の設定
7 月 13 日～17 日（現地調査実施）
　　京都市内　前祭見学　23 基訪問　他：京都大学、綾部市訪問
8 月 19 日～21 日　田名部祭り見学
　　夜間巡行、五車別れ見学　図書館にて資料収集
8 月 25 日　　野辺地祇園祭見学
　　最終日　山車合同運行見学

先行研究で取り上げた米山の著書は、まさしく学生が祇園祭の参与観察を行い、その町内会の活動を内側から記したものである。その調査の過程において、学生が自ら被調査者の側に踏み込み、逆に祭りの運営主体となっていく様子が描かれている。青森のおいてはねぶた祭の調査がそれに近い。学生は調査者であると同時に、市民でもあり、祭りに様々なかたちで参加する主体でもある。こうした調査者―被調査者という枠組みを超えた視点での参与観察の重要性を学んだといえる。祇園祭の基礎的な知識や、歴史については米山の著書のみならず、出版されている観光案内本、その他の論文などで事前学習をおこなった。祭りの概要に関しては次節で説明する。

調査を行ったのち、夏休みをはさみ 10 月～11 月の 2 か月にわたり調査結果のまとめと分析をおこなった。この結果は第 6 回公開講座兼、調査研究報告会（11 月 30 日（土）、於：新町キューブ）で一般向けに報告した。ゼミの学生にとっては調査結果をまとめ、報告するのは初の経験であり、教育効果が非常に高かったといえる。第一の班は「山、鉾」といった山車文化に注目して、ねぶた祭の「山車灯篭」と比較しつつ結果をまとめた。また第二の班は「観光戦略」を中心にまとめ報告をおこなった。どちらの班も共通していえるのが、その文化や観光に関わる人のネットワークや熱意といった点であろう。第 6 回公開講座で基調講演をおこなってくださった、武田俊輔准教授（滋賀大学）の言葉を借りれば、その山車の

継承や観光文化において、何を継承していくかによって、そこに関わる人的なネットワークの種類が違ってくるというという点が明らかになった。この点に関しては結論でもう一度振り返ることにする。

2　各祭の特徴

調査結果に関しては次節以降で詳しく述べられているので、今回の調査で訪問した祭りの特徴について若干説明を加えておく。

2.1　祇園祭

祇園祭はすでに知られているように、毎年 7 月 1 日から 31 日まで一か月間かけて行われる祭である。そこでは「山」「鉾」と言われる山車が組み上げられ、7 月 17 日の「前祭山鉾巡行」、7 月 24 日の「後祭山鉾巡行」で市内巡行が行われる。この「山」と「鉾」は動く美術館ともいわれ、祇園祭の最大の特徴であろう。祭りの中心の社、神社はよく知られているように「八坂神社」である。京都四条通の突き当りにあり、ここが起点となる。その意味では、青森のねぶた祭と違い神事として位置づけられる。

（写真 1：函谷鉾）

祇園祭はもともと平安時代（869 年）に飢饉に見舞われ、さらに全国で疫病がはやり、その原因とされていた怨霊を鎮めるための儀式としてはじまった。その時 66 本の矛を立て、牛頭天王（スサノオノミコト）を祀って 3 基の神輿を神泉苑に送り怨霊退散の儀式をおこなった。66 本の由来は、当時の日本の国の数で 1 国につき 1 本だったためと言われている。当初は「祇園御霊会」といわれそれが現在の「祇園祭」の起源である。今も 3 つの神輿は 17 日の「神幸祭」、24 日の「還行祭」で巡行される。そのため「山」「鉾」だけでなく。祭りにふさわしい「神輿」も登場するのも特徴的であろう。もっとも、もともと「山、鉾」の運行は「神輿」に乗った神様を喜ばせるためのものであり、露払い的な役割をもっていた。それが都市型の祭礼になっていくに従い、富や権力の象徴として豪華絢爛に装飾され、現在のようなかたちに変化していったといえる。ちなみに現在、前祭（7 月 14 日～16 日）には 23 基の山鉾が市内各所に展示され、後祭（7 月 21 日～23 日）には 10 紀基の山鉾登場している。

（写真 2：蟷螂山）

祇園祭期間（7 月）の京都の観光客数は約 383 万 4000 人、（日帰り約 255 万人、宿泊約 128 万人）となっている[1]。また 2018 年の先祭の「宵山」（16 日の夜、10 時時点）の人出は 24 万人と伝えられている[2]。なお平成 30 年の観光消費額は 1 兆 3082 億、観光客数は約 5,275 万人である。単純計算すると観光客ひとりあたり約 2 万 5 千円程度の消費額になり、これを 7 月の観光客数で計算すると、ひと月 950 億円程度の観光消費額になるだろう。

（写真 3：四条通、八坂神社前）

京都は年間通じて観光客が多く、必ずしも祇園祭の期間だけが観光客が多くなるわけではない。しかしながら、「前祭」「後祭」前においては多くの観光客が来訪し、歩行者天国となった四条通は人で溢れかえっている。こういった状況からも、多くの人に対応するための観光戦略がとられていることを伺い知ることができる。

2.2　田名部祭り

田名部まつりは、むつ市の田名部神社のお祭りで、正式には「田名部神社例大祭」という。期間は 8 月 18 日から 20 日におこなわれ、京都の祇園祭の流れをくむと言われている。起源は明らかになっていないが、菅江真澄の遊覧記『牧の朝露』に寛政 5 年（1793）の祭礼の様子が描かれており、200 年以上の歴史があることは明確になっている。

（写真 4：五車別れの様子）

特徴的なのは最終日に行われる「五車別れ」である。これは祭りで巡行する五台の山車が、それぞれの町内に帰っていく儀式である。来年の再開を期して、それぞれの組頭が盃を酌み交わし、深夜にかけて分かれていく。囃子が鳴り響き、多くの人が山車を曳いて動いてくその時に、名残惜しさも相まって地域の絆が深まるといえる。この 5 つの山車は、それぞれ稲荷山（横迎町豪川組）、猩猩山（小河町義勇組）、大黒山（柳町共進組）、蛭子山（本町・田名部町明盛組）、香爐峯（新町新盛組）と名前が付け

[1]『京都観光総合調査　平成 30 年（2018 年）1 月～12 月』京都市産業観光局

[2] 朝日新聞 DIGITAL「町に響く「コンチキチン」　祇園祭、宵山迎えにぎわう」（大村治郎 2018 年 7 月 17 日　0 時 16 分、参考 URL：https://www.asahi.com/articles/ASL7J4J9CL7JPLZB01C.html　2020 年 1 月 11 日引用）

られており、それぞれの山車を保護する組織が存在する（〇〇組）。これは町内会単位となっているものの、組への所属は町会をこえて行われているらしい。

（写真 5：田名部神社前）

田名部はもともと、むつ市の中心部東側をさす地名で、江戸時代から下北半島の商業経済・社会文化の要としての役割を担っていた。南部藩は、藩政時代の初期からここに代官所を置き、下北地方の要所としていた[3]。むつ市の人口は令和元年 11 月末現在で約 56,800 人である[4]。平成 21 年の人口が 64,690 人であり、ここ 10 年で 8000 人近く人口が減っているため、祭自体をいかに存続させるかも課題となっている。ただし調査結果で述べているが、むつ出身者がこの時期になると、祭に参加するために帰省してくるということもある。観光客中心の祭ではなく、地元の人が楽しむための祭として、古くから地域に根付いている印象を受ける。

（写真 6：能舞の様子）

祭の構成としては 8 月 18 日が宵宮。18 日と 19 日には各町内の山車が朝から神社前に集合し、夜の 10 時すぎに各町会に帰っていく。20 日は山車の合同運行で、祭典の行列と共に田名部の前町内を回り、運行が終わると神社前に再び集合し、それから各町内へ帰っていく。祭り期間中は境内に組まれた大舞台で、大神楽や東通村の能舞などが演じられる[5]。

今回の調査は 8 月 19 日～21 日行い、最終日の五車別れの様子を実際に体験した。なごり惜しくそれぞれの山車が各町会に帰っていく様、そして多くの人々が深夜まで参加しているのが印象的であった。

2.4　野辺地祇園祭

期間は 8 月 22 日～25 日に行われ、23 日が初日、24 日が海上運行、25 日が合同運行となっている。場所は野辺地市内であり、中心の神社は「野辺地八幡宮」である。豪華で工夫をこらした山車が 11 基登場し、それぞれその制作に関して競い合っている。そのため毎年、最優秀賞、優秀賞、秀作、特別賞、流粋賞 、輝星賞、祇園未来賞といった賞が与えられている。歴史については、北前船で京都から流れてきたとの説があるらしい。今回の調査は祇園祭と田名部祭りが中心で、野辺地祇園祭はその運行の様子だけを確認にいった。写真から

[3] 青森県立郷土館調査報告『青森県山車祭礼調査報告書　第 47 集　民俗―22』（平成 15 年、青森県立郷土館）
[4] むつ市 HP（http://www.city.mutsu.lg.jp/index.cfm/13,5625,13,287,html）
[5] むつ市編さん委員会『むつ市史　民俗編』（1985 年、むつ市）

もわかるように、かなりの装飾をほどこしたものであり、八戸の三社大祭に近いものがある。

（写真 7：野辺地祇園祭の山車）

（写真 8：山車の中で演奏する囃子）

3　祭礼の比較検討

3.1　祭の起源やその伝統、スタイル

さて祭はそもそも、「祖霊信仰」「来訪神」を祀ることが起源であり、そこには供養、厄除けや豊作祈願といった願いが込められている。「神輿」はそもそも神様が移動するときの乗り物であり、激しく揺さぶるほど神様が元気になるという。また「山車」は神様が降臨するための装置であったり、神様を囃すために楽団が乗るものであったりと、それぞれ目的が異なっている（久保田 2018：12-32）。

今回調査をおこなった祇園祭は日本最古の祭であり、日本全国各地にその影響を与えているといえるだろう。特に青森の南部地方で今回調査をおこなった、田名部、野辺地はもちろん、八戸や他の地域において山車祭礼がおこなわれている。これに対し、日本海側では「灯籠の祭」が分布しており、京都祇園祭の流れとは違った趣を出している。例えば阿南（2018）の報告では、日本海側には「夜高行燈（富山）」「キリコ（能登）」「鯛車（新潟）」「ねぶた（青森）」といった祭りが分布していると分析する。興味深いのは、田名部祭りの 2 日目の夜に五つの山車とは別に、神輿や山車、人形灯籠などが登場する「みこし祭」がある。ここでは灯籠祭の文化と、祇園祭の文化の融合が見られる。青森のねぶた祭自体は中心となる「神社」が存在しておらず、神様を祀るための祭とは言えず、民俗・慣習としての趣が強い。しかしながら七夕行事として「睡魔」を払う点や、「ねぶたを囃子たてる」点など、ある種の地元の神（ねぶたの神様）が存在していると感じられる。

こういった伝統や民間信仰、風習はそれを継続させる、そのこと自体に意味がある。継続することによって、様々な意味や価値、かかわる技術、名誉などといったものが生じる。その意味で祭りにかかわる人々が、どのようなネットワークをもとに祭を創り上げているのか、そのモチベーションは何かに注目することは決定的に重要である。例えば、武田の指摘する名誉・威信といった「用益」や公共的な価値づけを持つ「公共的用益」という視点はまさしく、祭礼を比較する上で有効な視点となる（武田 2019：87）[6]。「結果的に赤字となるこ

[6] 武田俊輔 2019『コモンズとしての都市祭礼：長浜曳山祭の都市社会学』新曜社

とはわかっているのに、なぜこれほど祭に熱中し、一年を通じて祭に力を注いでいるのか」という疑問は、ねぶた祭にかかわる多くの人が感じていることである。こういった点は他の祭礼と比較することで見えてくることもあるだろう。

3.2　都市祭礼の観光化志向と地元志向

祭を継続するという意識で決定的に重要であるのは、「地元志向」とも呼べる意識だと思われる。ねぶた祭の関係者からよく聞かれるのは、「近年祭がつまらなくなった」という言葉である。この背景には、観光客の対し「みせる」要素が強化したための「show」としての側面が強くなったことはよく指摘される。その結果、自分たちが楽しむということができない。昔熱狂し、我を忘れて参加した、まさしく「眠気を払う」儀式としてのねぶた祭の側面が失われているという意見である。

こういった視点でそれぞれの祭をみてみると特徴がまた浮かびあがってくる。京都祇園祭に関しては、すでに祭というよりも「観光客向けの美術館」といった感じが強い。通りに建立された「山」「鉾」を見るときでさえ、「危ないから立ち止まらないでください」と警備の人がアナウンスしている。上野動物園の「パンダ」見学のようである。そこには趣や風情、祭りといった感覚はない。圧倒的な数の飲食のための「屋台」がたちならび、「お金を落と」させることが主たる目的となっているようである。もちろんこれは観光客側からの視点であり、地元の人々の存続への苦労や工夫がそれぞれなされているのは言うまでもない。ここで指摘したいのは、むしろ観光に特化された結果は祇園祭に象徴されるという点である。

この真逆ともいえるのが、今回訪問した田名部祭であった。ここの参加している人々は圧倒的に地元の人々である。衣装も地元の 5 つの山車地域から借りた「半纏」をまとうのが、「かっこいい」規準である。また外部者が訪問しても、地元の人々と距離が近く、山車はもちろん、そこで主体となっている人々と気軽に話すことができる。地理的に本州の最北端の一部であり、簡単には観光客も訪れなることができないためかもしれない。「県外に出ていった人々も毎年戻ってくるんです」という言葉が、聞く人、聞く人から聞かれたのも特徴的である。こういった祭りは、徹底的に観光化されているわけではなく、「地元志向」の強い「祭礼」として位置づけられるであろう。

（写真 9：明盛組の半纏）

祭の二極化はそこに関わる人々の大きな課題といえるのは間違いない。それを打破するために、ねぶた祭でも「地域ねぶた」に再度注目を集めることや、最終日に以前盛り上がっていたような運行スタイル（吹き流し）を採用するなど、様々な取り組みがなされている。経済効果が期待される、観光資源としての祭と地元の人々の伝統としての祭の相克は今後も考えていく必要があるだろう。

3.3　祭りという地域資源：継承者と文化

さてではなぜ祭が継承されているくのか。またなぜ皆が、たとえ継承の意識がなくとも熱狂して参加する人がいるのか。これに関し今回の調査から明らかになった点を述べてみたい。先ほど武田の視点をかりて「(公共的）用益」という言葉を使用したが、これも祭への関わり方によって、目指すものが大きく違ってくる。すなわち祭りごとに、独自の価値意識が存在する。

例えばねぶた祭を念頭におくと、その造形物の技巧の評価と名誉という点が真っ先に指摘できる。ねぶたの造形はまさしく世界に認められた「ペーパークラフト」であり、その後継者を育てるという課題も含め、技術の粋を結集させた現代的なアートともいえる。実際に、イギリス大英博物館やロサンゼルスのハリウッドをはじめ、世界各地にねぶたが出張し、評価されている。

こうした芸術的な側面が進む背景には、毎年行われる「受賞」という制度がその権威を補完しているのは間違いない。ある種の競争意識が高まると、その技術水準は格段に進歩する。例えば、ねぶたを中から照らす明かりにしても「ろうそく」「電球」「蛍光灯」「ＬＥＤ」、近年では「テープ型ＬＥＤ」など、技術の深化がねぶたの変化を支えている。つまり技術の最先端が「祭」という舞台で使用されるのである。今回の比較調査では「野辺地祇園祭」がその方式をとっている。毎年違った造形物が登場し、賞が競われていた。今後ある種の天才、カリスマの登場によってその技工物もさらに変化、進化を遂げるかもしれない。

（写真 10：テープ型ＬＥＤ）

では祇園祭はどうなのか。武田は長浜曳山祭に関わる人の分析において、祭りの伝統や継承、技工物の作成方法により関わる人が変化することを指摘する[7]。例えば長浜曳山祭では（子ども）狂言（歌舞伎）が上演されるが、その技術指導は本格的な歌舞伎関係者による指導が行われる。また祇園祭にしてもそうだが、歴史的にも長く使用されている神輿や、山車に関してはその修復にも古来のやり方が使用される。そこで動員される人々は、伝統の技術を持った職人であり、「昔と同じ工法・技能」を受け継いでいる人になってくる。ねぶたの山車が一回性を前提としているのに対し、有形の文化財を残すことはまた別の技術が必要になる。こうしてねぶた祭にせよ、祇園祭にせよ、ある種の地域の象徴、有形・無形の文化資源としてその土地に残されていく。そしてそこに関わっていくことが、一つの名誉であり、祖先とのつながりを意識する証左となっていくと思われる。

[7] 11 月 30 日シンポジウムの際の学生報告に関する、武田のコメントを参考にさせてもらっている。

まとめ

さて本稿の冒頭の問題意思にそって、全体をまとめておこう。本比較調査研究の最大の目的は、祭とコミュティ形成の関連について、他の祭と比較しながら考えていくことにあった。というのも、これまで数年にわたり、ねぶた祭のみを分析対象としてきたが、このコミュティ形成の役割という点に関しては、他の祭でも同様の機能が見られるのだろうかという疑問があったからである。そして機能的には同様であっても、その祭りごとに特徴が違うのではないかという点を明らかにしたかった。すなわち、祭りに動員される人的、社会的、文化的資源の差異が、当該コミュティ形成の独自性を生み出す結果につながっているという点が重要だと思われる。

具体手な比較でいえば、まず祇園祭に関してはこの後の第 2 節でも紹介されるが、その「山」「鉾」を維持、存続させるための基金集めや、その保存の主体が町会単位になっているなどの特徴がある。これは田名部祭りや、野辺地祇園祭にもみられ、古くからの行政単位がその基本となっていることが多いようである。そのため祭自体が地域住民を繋げる役割をもちつつ、逆に祭があることによって町内の結束が固まるという結果を生みだすことになる。それは同時に、他の町会や町会内での名誉を巡る競争意識[8]を生み出すことにもなっており、これが名誉や威信と深く結びついている。この神様を掛け金とした、人間社会の名誉・威信を巡る闘争こそが祭を紐帯とした社会関係のダイナミズムを生み出しているといえる。そしてその名誉・威信は個人のものでも、集団のものにもなりうるし、その期間は早ければ一年ごとに、長ければ世代を越えて続いていくものである。

青森ねぶた祭は、企業ねぶたが基本であるものの、そこに関わる人々の絆や競争意識の作られ方は同じ構造を持っているといえる。さらに、町会単位であれば青森市には「地域ねぶた」が存在し、その制作や運行方式は注目に値する[9]。

いずれにせよ青森に居住してからというものの、年間通じてねぶた祭で話が盛り上がるという感覚は、職業や地域ではなく市民としてのプライドや、市民間同士での意地の張り合い、競争意識をいやがおうにも感じさせられる。その意味では基本的には祭りは「地元志向」のものでしかありえないといえるのではないか。

本年度よりいよいよ、他の祭とねぶた祭を比較する段階に入ったといえるだろう。足元だけを見ていても自らの立ち位置はわからない。伝統的な祭や、古くから伝わる祭を実際に訪問してみることで多くのことを学ぶことができた。もちろんそれぞれの祭を一回だけ、少しだけかじっただけでは何も理解したことにはならないだろう。そのため今後も意識して継続的に比較を行い、「青森ねぶた祭」の特徴をさらに浮き彫りにしていくつもりである。

8　この競争関係は、例えば長浜曳山祭にみられるような「コンフリクト」として生じることもある（武田 2019）。なぜ祭において「けんか」がセットなって語られるのか。その背景には名誉や威信、日常用語でいえば「なめられたくない」「評価されたい」という欲求があると思われる。

9　2016 年の報告書『青森ちいきねぶたの現在とその可能性』（青森大学　社会学部　佐々木研究室）を参照。

参考文献

青森県立郷土館 2003『青森県山車祭礼調査報告書　青森県立郷土館調査報告　第 47 集　民俗-22』

阿南透 2018「日本・世界に広がるねぶた」青森公立大学公開講座（2018 年 11 月 1 日、於：アウガ 5 階、カダール広場）

芳賀直子 2017『祇園祭の愉しみ』株式会社ＰＨＰ研究所

久保田裕道 2018『日本の祭り　解剖図鑑』X-Kowledge

『京都観光総合調査　平成 30 年（2018 年）1 月～12 月』京都市産業観光局

むつ市史編さん委員会 1986『むつ市史　民俗編』むつ市

佐々木てる 2016『青森地域ねぶたの現在とその可能性』青森大学社会学部・佐々木研究室

武田俊輔 2019『コモンズとしての都市祭礼：長浜曳山祭の都市社会学』新曜社

米山俊直 1974『祇園祭　～都市人類学ことはじめ～』中央公論社

参考ＨＰ

むつ市 HP（http://www.city.mutsu.lg.jp/index.cfm/13,5625,13,287,html）

朝日新聞 DIGITAL「町に響く「コンチキチン」　祇園祭、宵山迎えにぎわう」（大村治郎 2018 年 7 月 17 日 0 時 16 分、参考 URL：https://www.asahi.com/articles/ASL7J4J9CL7JPLZB01C.html　2020 年 1 月 11 日引用）

2　祭礼の歴史文化の継承

～三つの山車の比較を通して～

青森公立大学　地域みらい学科　佐々木ゼミ２年
野呂優華　　三上華歩

はじめに

近年、少子高齢化や過疎化などの人口減少によって、祭礼の担い手不足が懸念されている佐々木ゼミではこのような社会問題を背景に、全国の祭がどのようにそれらの問題を解決しているかを考えている。そこで本年度は祭礼比較、特に山車を通じて、伝統文化の継承方法と、それぞれの祭礼の強みや課題などの特徴を明らかにし、今後のねぶた祭りの運営について考えていくことにした。祭礼比較のポイントとしては、多くの祭礼には山車が必要不可欠であり、文化継承の重要な役割を担っていると考えられる。そのため、各祭の山車に注目してみた。

例えばねぶた祭りは、ねぶたという山車灯籠が使用されている。また先行研究をまとめる過程で、京都の祇園祭といくつかの共通点があったことがわかった。そのため、今回は比較調査の対象として祇園祭をあつかうこととした。祇園祭は全国でも有名な祭りである。ねぶた祭と比較すると、例えばくじで山車の巡行や、毎年巡行の先頭が決まっていることが共通点として挙げられる。また祇園祭は、山車祭りの元祖であり、国や地域からの支援や保護により守り続けられ、1000 年以上の歴史と、多くの本の出版や文献がある。また祇園祭と類似点が多い祭礼としては、青森県下北地方の最大の夏祭りである田名部まつりが指摘できる。具体的には、地区ごとに祭りが運営されていることと、祇園囃子が取り入れられていることが挙げられる。こうしたことからこれら三つの祭を比較することとした。

本論文では３つの山車を通じて、祭礼の歴史文化の比較を行い、祭礼の歴史文化の継承を明らかにした。特にどの祭りにおいても、継承のための独自の工夫がとられており、特に維持のための地域ぐるみでの集金制度が特徴的であった。

これらのことを示すために、次のような構成で論文を展開していく。まずは、多くの祭りに必要不可欠な山車の概要について説明し、ねぶた祭をはじめした青森県内の山車祭りの形式に着目する。続いて、それぞれの祭礼の歴史文化について比較する。具体的には祭礼の概要や歴史文化と山車である。祇園祭に関しては、聞き取り調査も行ったので、そこからわかった知見を紹介していく。最後に考察においで、３つの祭礼の比較をすることにする。

1　山車の概要

祭礼比較のポイントとして、多くの祭りに欠かせない山車について考えていく。これから比較する３つの祭りも、山車が文化継承の重要な役割を担っていると思われるからである。

まず簡単に、山車の説明をする。山車とは、その昔、日本で山に神がいると考えられていた民間信仰の名残で、山岳を模してつくられたものである。ここでいう民間信仰とは、組織を持たず、地域で信仰されているものを指す。そして３つの祭礼に共通している点として、人力で運行されていることが挙げられる。

しかし一口に山車と言っても、山・鉾・屋台といった種類や目的があり、形式や呼び名は地方によって異なる。例えばねぶた祭は山車灯籠、祇園祭は山鉾、田名部まつりはヤマと呼ばれている。山車の形式は、青森県内においても異なり、津軽地方と南部地方でそれぞれの特徴が見られる。例えば津軽地方では、青森ねぶた祭・弘前ねぷた祭・五所川原立佞武多のような山車灯篭という形式、南部地方では、人形の乗った山車と厳かな雰囲気を感じさせる田名部まつり・八戸三社大祭、京都の祇園祭が名称の由来である野辺地祇園祭のように、祇園祭の要素を含む形式もある。

2　祭礼の歴史文化

2.1　祇園祭

Ⅰ概要

祇園祭は、東京都の神田祭りと大阪府の天神祭りに並ぶ日本三大祭りであり、7 月 1 日～31 日の一か月間開催されるものである。この期間において、前祭と後祭に分け、山鉾巡行が開始され、そのほかにも、鉾建てや山建て、屏風祭、宵山などの行事が行われている。

Ⅱ　歴史文化と山車

明治 5 年以降、財政面において山鉾の維持が困難になったため、祭りを執行する組織が必要となった。大正 12 年、京都市による修繕補助制度の新設や、祇園祭山鉾町連合会が結成された。このような国や地域からの支援や保護により守り続けられ、1000 年以上の歴史と、多くの本の出版や文献があり、その後、2016 年ユネスコ無形文化遺産に登録された。

また祇園祭は、山車祭りの元祖であると言われています。この祭礼において用いられる山車を「山鉾」と呼び、山鉾 33 基あり、その巡行の順番を「くじ取り式」という方法で決める。それぞれには、平家物語や和漢の故事がモチーフ、そして神様の御利益がある。

Ⅲ　聞き取り調査

私たちは、祇園祭のフィールドワークにおいて、山鉾の山を担当した。そこで前祭で運行される木賊山の責任者の方にインタビューを実際に行い、さまざまな特徴を聞くことができた。

まずは歴史について紹介する。ある日、信濃に住んでいる子供が誘拐された。その子供は

成長して、父親に会いたいと思い、故郷の信濃に帰ったところ、トクサという植物を刈っている老人と出会った。そして、その老人の家に泊めてもらい、舞を見て、老人が父親であると気づいたのである。これは世阿弥の謡曲、木賊山のテーマであり、また子供のころ、トクサという植物で遊んでいたエピソードと、息子に会えずにトクサを刈っている様子が山で表現されている。このテーマが由来となり、迷子除け、再会、そして厄除け、疫病除けの御利益があるともいわれている。

資金面においては、国や市の補助金と募金でまかなわれることに加え、住民自らの資金援助によって成り立っている。そして祭りを維持しなければならないという使命感をもった住民主体の運営であり、ボランティアによる山の曳き手やグッズ販売などが行われている。

そのほかのお話によると、現在、高齢化による人手不足という課題に直面しつつあり、この課題を踏まえて、現在まで継承されてきた木賊山の巡行を今後続けていくために、人集めが重要なのではないかと考えられている。また実際に調査をしてみて、木賊山では、親世代のような、年齢層の高い参加者が中心に運営しており、将来祭りを担う希望のある若者が少ないように感じた。そこで私たちは、木賊山を含む祇園祭が、枠にとらわれた伝統形式に加え、若者が関心を持つような形式を取り入れた祭りにすることで、若者という新たな担い手を確保することができるのではないかと考えた。

写真①　木賊山

写真②　木賊山の御神体と装飾品

写真③　木賊山保存会による活動

写真①は、木賊山が巡行されている様子である。写真②は、木賊山の巡行される際に用いられる御神体や山車の装飾品が保存されている様子である。写真③は、木賊山の手ぬぐい等の販売や御朱印が行われている様子である。

2.2　田名部まつり

Ⅰ概要

まず田名部まつりを取り上げた理由は、祇園祭と類似点があると考えられたからである。例えば、祇園祭と田名部まつりは地区ごとに祭りが運営されていることと、祇園囃子が取り入れられていることが挙げられる。

田名部まつりは、下北地方最大の夏祭りと言われており、8 月 18 日～20 日の 3 日間に開催されるものである。

Ⅱ歴史文化と山車

起源は明確ではないが、約 370 年以上の歴史がある。その後、1999 年県指定の無形民俗文化財に登録された。

この祭礼において用いられる木製・黒漆塗りの豪華絢爛な山車を「ヤマ」と呼ばれ、5 台で運行される。このヤマの運行は、固有の組名があり、18 歳～39 歳までの男性による「若者組」が携わっている。また昼の運行は、荘厳で威風堂々とした趣、風格と威厳を持っている「静」、夜の運行は昼とは一変し、テンポの早いお囃子が演奏される「動」と言われている。そして最終日深夜には、5 台の山車が一堂に会して樽酒を酌み交わし、来年の再会を誓う「五車別れ」で、祭りの最高潮を迎える。

写真①　田名部まつりの様子

写真②　五車別れ

写真①は、田名部まつりにおいて用いられる木製・黒漆塗りの豪華絢爛なヤマ 5 台で運行している様子である。写真②は、最終日深夜に、5 台のヤマが来年の再会を誓う五車別れを行っている様子で、祭りのクライマックスを迎える。

2.3　ねぶた祭

Ⅰ概要

青森の象徴ともいえるねぶた祭は、８月２日～７日の６日間に開催されるものである。

Ⅱ歴史文化と山車

今年実際に調査を行った２つの祭礼と、ゼミで調査を進めているねぶた祭との比較を行っていく。

まずねぶた祭の歴史文化については、七夕祭りの灯籠流しの変形であると言われるが、その起源は明確ではなく、約３００年以上の歴史がある。その後、１９８０年国の重要無形民俗文化財に登録された。次に各祭りにおいて用いられる山車について、祇園祭では「山鉾」、田名部まつりでは「ヤマ」と言われるが、ねぶた祭りでは「ねぶた」という山車灯籠と呼ばれている。そして祇園祭では山鉾３３基、田名部まつりでは５台のヤマで運行されるが、ねぶた祭りでは２２団体の運行団体で構成されている。さらに祇園祭では、平家物語や和漢の故事、田名部まつりでは、祇園祭を模したものがモチーフとされるが、ねぶた祭りでは、日本や中国の歴史上人物、歌舞伎、神仏、そして地元の伝説や偉人などが題材とされている。

３つの祭礼には、それぞれ特徴があるが、中には共通点も見られる。祇園祭とねぶた祭の山車の巡行をくじで決めること、祇園祭は長刀鉾、ねぶた祭りは青森 PTA 連合会が毎年巡行の先頭を務めることが挙げられる。かつて、ねぶた祭りは、祇園祭のように、一台ずつ山車を運行する「ふきながし」という形式だったが、カラス跳人による問題などによって、現在では、一斉に巡行されている。

3　考察

表１は、本報告の目的である、それぞれの祭礼の特徴を用いて、３つの祭礼の比較を行ったものである。

まずは、祇園祭についてである。私たちが木賊山の責任者にインタビューをした際、祇園祭全体の特徴として、１０００年以上の歴史的価値と、それを維持しなければならないという使命感によって、現在も祭りが運営され続けられていることが挙げられている。募金や市からだけでなく、国からの補助金による支援、そしてユネスコ無形文化遺産の登録によって、国内だけでなく、世界にも認められる日本の祭りであることも強みだと考えられる。その一方で、伝統的な儀式によって、参加者が限定され、特に若者の関心・参加率が低いように感じられた。

続いては、田名部まつりについてである。田名部まつりは、地元愛に溢れている住民が多いため、参加者が老若男女を問わず、そして商店街などの地元からの寄付金によって支援されている一方で、外部への情報発信が少ないため、地元密着の祭りにとどまり、祭りの活性化が見込めないと考えられている。

表１　３つの祭礼の比較

	強み	課題
祇園祭	歴史的価値 1000 年以上の歴史による使命感 ユネスコ無形文化遺産	若者の関心・参加率の低さ
田名部まつり	地元愛 老若男女の参加者	外部への情報発信不足
ねぶた祭	伝統と革新の融合 祭りの参加者や見物客の一体化 全国各地への進出	観光客のための祭か 地元の人々のための祭か

最後は、ねぶた祭についてである。ねぶた祭りは、昔からの伝統を継承しつつ、新しいテーマや、山車灯籠にテープ式ＬＥＤライトを用いるなど、伝統と革新の融合がされており、そして参加型と、祭りの参加者や見物客が一体化して楽しむことのできる点が魅力的だと考えられる。このほか、最近では、ねぶたが関東地方にも進出しており、全国各地への新たなファンの拡大にも期待できる。課題としては、地元の人々の満足度より、観光に特化した傾向が強くなっている点が指摘できる。地域ねぶたへの回帰も含め、今後考えていくべき課題である。

おわりに

祭礼比較の分析を行ったところ、祇園祭・田名部まつり・ねぶた祭を含む全国の祭礼の担い手が不足していることが懸念されている。祭礼比較のポイントとして、多くの祭礼には山車が必要不可欠であり、文化継承の重要な役割を担っていると考えられる。そして祭礼の歴史文化の継承のヒントを得ることもできた。それは、地元民自身が、祭りに対する関心や愛着を持ちながら、祭りの伝統を継承し続けることが重要であるという点である。そのためには、若者を含む人々の関心を高めることで、祭りの担い手を確保するとともに、伝統を継承し続けることもできるが考えた。またねぶた祭りの歴史文化や魅力を再発見することもできた。その具体例をあげると、制作者による伝統と革新が融合されている点と、祭りの参加者や見物客も一体化して楽しむことができる点である。また主に関東地方ではねぶた、その他各地でもねぶたの要素を含む祭りなど、全国にも発信されていることから、ねぶた祭りは、地元民だけでなく、スポンサーやリピーターなどからも支持を得ており、今後新たなファンが増えることで、祭りの活性化が期待できるのではないかと考えられる。

感想

野呂優華

私は、３つの祭礼比較において、特に京都の祇園祭が印象に残った。その理由は、以前から京都に興味があったが、今回の祇園祭調査を通じて、祇園祭の歴史や文化はもちろん、京都のことをより知ることができたからである。またこの調査前に行った下調べと、実際に現地に行ったことで、祇園祭の歴史や文化だけでなく、この祭りならではの厳かな雰囲気、さまざまな工夫を施した観光戦略とそれによる観光客の多さ、そして資金や担い手といった現状などを学び、とても貴重な経験をすることもできてよかった。

三上華歩

私の地元の祭り、八戸三社大祭は祇園祭の要素を含むといわれている。三社大祭の山車は、人形や装飾が派手な雰囲気が漂うが、祇園祭は静かで厳かなイメージを持っている印象を受けた。同じ要素を含む祭りでも様々な文化の違いを感じた。一方、祇園祭で行ったときに感じられた、お客さんが祭りよりも出店のものを食べることを楽しんでいる印象は、三社大祭にも共通していると感じた。今回の調査で一番良かったことは、実際に現地へ調査をしたからこそわかる、祭りの比較ができたことだと思う。

参考文献

山岡祐子他　2008　『祇園祭のひみつ』　白川書院
久保田裕道　2018　『日本の祭り　解剖図鑑』　株式会社エクスナレッジ
むつ市史編さん委員会　2003　『青森県山車祭礼調査報告書』　第一法規出版株式会社

参考 URL

京都観光情報　KYOTO　design　https://kyoto-design.jp（2019.12.16）
青森ねぶた祭　オフィシャルサイト https://www.nebuta.jp　(2019.12.16)

3　祭礼比較から学ぶ新しい観光戦略

～京都祇園祭と田名部祭りの調査より～

青森公立大学　地域みらい学科　佐々木ゼミ 2 年
竹谷　雅　　鈴木玲奈　　櫛引星希

はじめに

現在、青森ねぶた祭は例年 280 万人の観光客が訪れる人気の祭りである。県内のみならず、県外や海外にも知れ渡っているほどの人気だ。しかし、これほど多くの観光客が訪れるが、この経済効果が一過性のものに過ぎない。私たちは青森ねぶた祭の集客力をさらに伸ばし、最終的に青森市の活性化に繋げるためにはどうするべきか考えた。

そこで、多くの観光客を集めている日本三大祭りの一つである京都祇園祭に着目した。京都祇園祭は例年 5000 万人もの観光客を集める祭りであり、約 1100 年前から行われる長い歴史を持つ祭りでもある。現代まで祭りを続けてきたのは、長年商業化とうまく結び付けて運営してきたからであると考えた。よって、青森ねぶた祭にも活かせるような観光戦略のヒントが多く得られると考え調査した。

当初は、青森ねぶた祭と京都祇園祭の二つの祭りを調査する予定であったが、むつ市の田名部まつりも調査対象とすることにした。田名部まつりは、約 400 年近い歴史をもつ祭りである。調査の根拠は京都祇園祭の流れを汲んでいる類似した祭礼で、京都祇園祭よりも地元に密着した祭礼であるため、地域に根差した観光戦略を学べると考えたからだ。

そこで、私たちは青森ねぶた祭と京都祇園祭、田名部まつりを実際に現地に行って調査した。そこで見て体験し、感じたことをもとに３つの祭礼の観光について比較し、青森ねぶた祭がより一層の盛り上がりを見せるためのこれからの青森ねぶた祭の観光について考えた。

３つの祭礼の観光戦略の在り方は、パンフレットを配って外部に情報を発信したりしてインバウンド対策をしっかりしているところもあれば、その地域の中だけで楽しむというところもあるなど、それぞれで異なっていた。また、観光客が多いからといって盛り上がっているわけでもないということなどもわかった。普段は青森ねぶた祭以外の祭りを観ることがほとんどないため、他の祭りの観光戦略は新鮮であり、青森ねぶた祭にも取り入れたい戦略も多くあった。

本報告では、京都祇園祭、田名部まつり、ねぶた祭で気づいた観光戦略の特に私たちが印象に残ったものを紹介し、そこから考えた青森ねぶた祭への提案、考察、まとめの順で述べ、３つの祭りの違いを明らかにしていく。

1　京都祇園祭で気づいた観光戦略

京都祇園祭は、京都府京都市東山区の八坂神社の祭礼である。青森ねぶた祭は「皆でワイワイ楽しむ」という印象があるが、京都祇園祭は「山車をゆっくり見ながら祭りの風情を楽しんでいる」ように感じられた。市民参加型の祭りとは言い難い、特定の市民が毎年参加して祭りを運営しているようであった。また、京都祇園祭はどこに行っても人で溢れかえり、どの路地にも出店があり山車よりも食事を楽しんでいる人が多い様子だった。

・屏風祭り	・パンフレットが豊富
・バスの案内カード	・着物レンタル
・おみくじ	・タピオカ割引（着物着用）
・外国語表示が多い	・グッズ販売の充実
・展示会が多い	・御朱印集め

こちらは私たちが京都で学んだ京都祇園祭の観光戦略である。青森にはないような観光客向けの対策が豊富で、日本三大祭りの一つとして多くの観光客を集めている理由が身をもって感じられた。以下、いくつかに分けて紹介する。

①屏風祭り

屏風祭りとは、祇園祭開催期間中に行われる行事で、山鉾町にある旧家や老舗がそれぞれの所蔵する屏風美術品、調度品などを飾り、公開するものである。実際に街を歩いてみると、屏風だけでなく様々なお宝が展示されており、大勢の人の注目を集めていた。右の写真は、公開されていた屏風である。屏風祭りでは有料で公開されるものもあるが、こちらは一般公開されていたものである。個性的なものや美しいものが多く展示されていたため、一つ一つに目が行ってしまう。街中に各山鉾のお宝が展示されていることで、観光客は展示を見ながら同時に京都の街並みを楽しんでいるようだった。そこで私たちは、青森ねぶた祭でも街の至る所に各団体の展示やねぶたグッズ・衣装展示を用意して、ねぶたを見に来た人たちに青森の街並みを楽しんでもらう工夫がされるとよいなと考えた。

②展示会

京都タワーや京都駅、百貨店などで祇園祭の展示会が開かれていた。展示会では山車の模型が飾られていたり、資料の展示があったり、誰が見てもわかりやすく祇園祭の歴史を学べるようになっていた。資料や写真から知識を得ることで祭りの見所などが分かり祭りが楽しみになる。展示がある場所やアーケード街などいたるところで祇園祭の囃子が流れていて京都全体が祭り一色に染まっていた。青森ねぶた祭も期間中様々な場所でねぶたを楽しめるように展示の数を増やしたり、新町商店街にねぶた囃子をもっと流したりすると、より一層祭りの雰囲気が強まって盛り上がりを見せると感じた。

③タピオカ割引（着物着用）

祇園祭期間中の店のサービスについて紹介する。京都タワー１階にある「ベリーズ」というタピオカ専門店では、着物を着用したお客様に商品の割引を行っていた。調べたところ、タピオカ店だけでなく、タクシー会社や宿泊施設でも観光客向けの割引サービスを行っているようだった。私達も実際に浴衣をレンタルしてみましたが気分が上がり普段の服装のときよりも楽しく歩くことができた。観光客向けサービスは青森より充実しており、青森でもねぶたの衣装のレンタルがあるようなので着用したお客様に対する特別なサービスを PR するべきだと考える。衣装を着ることでより多くの人を青森ねぶた祭のファンにすることができるだろう。

④グッズ販売の充実

京都祇園祭では山鉾ごとに多様にグッズを販売していた。例えば、山鉾によって異なるデザインをあしらったタオルや手ぬぐい、扇子などが売られていた。グッズの売上金は山車の修理費用や運行費にあてられるそうだ。青森ねぶた祭では、グッズ販売をしている団体もありますが、していない団体が多い。団体ごとに異なるグッズをもっと販売することで、さらなる利益を得ることができるのではないだろうか。

⑤御朱印集め

京都祇園祭では、山鉾ごとにオリジナルの御朱印が用意されている。観光客や住民、祭り好きの人たちは全ての山鉾を廻って御朱印をコンプリートすることを楽しんでいた。
料金は取られるところもあるが、コレクターや観光客は興味を持ち、御朱印を集めるためにすべての山鉾を見ようと街を歩き回るので、祭りをより楽しむ素晴らしい観光戦略であると考えた。青森ねぶた祭も、団体ごとにオリジナルスタンプなどを用意してスタンプラリー

を開催してみるのも新たな楽しみ方になると考える。

⑥おみくじ

祇園祭では、おみくじも豊富だった。特に蟷螂山では、カマキリがおみくじを運ぶ「からくり蟷螂おみくじ」が観光客にとても人気で、大行列を成していた。青森ねぶた祭もねぶたがおみくじを運ぶねぶたおみくじのような観光客の興味をひくプチイベントを作ると、名物になり、さらに祭りに活気を与えるのではないだろうか。御朱印もおみくじも、ちょっとした戦略に感じられるが、そこから利益を得て、京都祇園祭りを盛り上げつつ財政面からも支えているのである。

⑦パンフレット　バスの案内カード

道に迷った私たちは京都駅のバスの案内所で、バスの乗り場等が詳しく記載されている案内カードをいただいた。その案内カードには、バスと電車の両方が記載されており、ほかにも乗り場や種類、降車すべき停留所の名前などが４か国語で書かれていた。このカードのおかげで、安心して目的地までたどり着けた。そして、カードの裏には、飲食店の割引も記載され、割引としてのカードにもなるので、とても便利だった。このカードのおかげで、案内をする側も時間の短縮が可能になる。また、割引券にもなるため、青森市内のお店に足を運んでくれる機会が増えると考える。そして外国語の表示により、海外からの観光客にも優しいため、さらなる観光客の増加が見込める。

2　田名部まつりで気づいた観光戦略

田名部まつりは、青森県むつ市の田名部地区で行われる祭礼である。太平洋側の沿岸地域では祇園に似た祭礼が多いといわれており、田名部まつりもその一つである。その情報を耳にしたため、比較対象として適していた。

また、田名部まつりは比較的、地域の中だけに開かれ、地域に密着しており、地域の住民が主体となっているため、住民参加型の戦略が学べると考えた。田名部まつりは、山車や祭り自体の雰囲気が京都の祇園祭と似ていた。パンフレットなど外に情報を発信するものがなかったため、観光客を誘致しようという戦略が見られず田名部地区住民のための内輪の祭りであるという印象を受けた。

- 祇園祭とつくりが同じ
- 観光客を誘致しようとする戦略が見られなかった
- 内輪の祭り
- 住民の団結力
- 祭り愛、地元愛を感じた
- パンフレットなし
- 夜中まで
- 運行経路図はあった
- 神輿ごとで違う衣装の魅力
- 誰に聞いても祭りのことが詳しくわかる

①神輿ごとに違う法被

田名部まつりでは、団体ごとに異なる法被を着用しており、背中のところに各団体の文字が入っている。それらの法被は前もって住民に貸し出されるようで、祭りに参加する住民は並んで法被をもらいに行く。私たちがショッピングモールに立ち寄った際に、法被を着てプリクラを撮っている女子中学生や高校生を多く見かけた。法被を着てプリクラや写真を撮ることが学生にとって楽しみになっているようだ。衣装を着ることが目的だとしても、ねぶた祭に興味を持つ若者が増えると考える。観光客には、見てもらうだけでなく、衣装を着て祭りに参加してもらって、祭りの良さを体感してもらいたいと強く思った。

②住民の祭り愛

そして、田名部まつりに関する資料が少なかったため、住民に話を聞いた。大人はもちろん中学生も田名部まつりの細かなことまで知っていて楽しそうに語ってくれた。東京の学校に進学したという男子学生に話を伺ってみると、県外へ進学した学生たちのほとんどは、祭りに参加するために必ず帰省するのだとおっしゃっていた。また、ある学生は夏といえば

田名部まつりであり、1 年の楽しみにしているとおっしゃっていた。このことから、地元を離れた若者を戻ってきたいと思わせるような、地元の住民を心の底から魅了するものが田名部まつりにはあるのだとわかった。田名部地区住民のような祭り愛が、祭りを継承していく大きな役割を担っていると考えた。青森ねぶた祭にも若者が青森に戻ってきたい、または永住したいと思わせるような祭り愛が必要だと感じた。

3　ねぶた祭で気づいた観光戦略

青森ねぶた祭りは青森県青森市で開催される祭礼である。昭和５５年に重要無形民俗文化財に指定された。期間中は２２団体の山車が巡行する。モチーフは神話などの名シーンが使われることが多い。参加者は、「ねぶた」「跳人（ハネト）」「囃子」の三役で１つの団体を形成する。そして、青森ねぶた祭では審査制度があり、特に良い山車にはねぶた大賞が贈られ、その他にも運行賞や囃子賞などもある。この審査制度も祭りをさらに盛り上げる重要な取り組みだ。

・跳人の衣装を着れば誰でも参加できる
・跳人衣装のレンタル
・観覧席が多い
・地べたに敷物を敷いて間近で見ることができる
・パンフレット等を配布
・リアルタイムで山車の位置が分かるアプリがある

①　当日の飛び入り参加が可能

青森ねぶた祭では、跳人衣装を着ていれば誰でも参加が可能である。また、跳人衣装のレンタルを行っている店も多い。そこでは誰でも借りることができるため、地元の人だけでなく観光客も気軽に衣装を着て祭りに参加できる。

②　観覧席が多い

自由に観覧できる観覧エリアや桟敷席が多い。観覧席はねぶたをゆったり見られる有料の席と、無料の席の２種類がある。観覧用のパイプ椅子も沿道に多く設けられ、ねぶたを間近で見ることができる。

③ パンフレットの配布

運行経路図が記載されているパンフレットを至る所で配布し、また、リアルタイムで山車の位置を確認できるアプリもあるため、初めて来た観光客にとても優しい。

まとめ

ここで、3 つの祭りをランキングにして分析する。客数は京都祇園祭が 3 大祭りとだけあって一番多かった。一番少なかったのは田名部まつりである。これは観光戦略の充実度が関係していると考えられる。京都祇園祭はパンフレットや展示など祭りについての情報が十分に発信されていて観光客も集まりやすい環境になっている一方で、田名部まつりはパンフレットもほとんどなく地域の人だけで楽しむものになっていた。私たちが実際に現地に行って分かったのは、あくまでも私たちの主観であるが、人が多くいればいるほど楽しく盛り上がっているわけではないということである。京都祇園祭は、人はたくさんいたが、祭り自体を楽しんでいるというよりも、出店で食事を楽しんでいる様子だった。むしろ京都祇園祭と比べると集客の少ない青森ねぶた祭や田名部まつりのほうが、祭り自体にも人々にも活気があり盛り上がりを見せていた。3 つの祭りを比較した結果、一番盛り上がっていて楽しかったのは、青森ねぶた祭だった。やはり、京都祇園祭のように見ているだけでは祭りに来たという感じがせず、青森ねぶた祭のように跳ねたり掛け声をみんなで一緒にやったりして参加することで、楽しさを感じて満足のいくものになると考える。

私たちは、この青森市民を一つにする力をもっている青森ねぶた祭の活気を、さらに高めることが青森市の活性化に一役買うと考える。そのために、先ほど私たちが提案したような新しい観光戦略で商業化と結び付けていくことで、青森ねぶた祭がさらに盛り上がると考えている。青森ねぶた祭のこれまで培ってきた歴史は、もちろん大切ではある。しかし、良いものは取り入れながら、更に発展させていくべきである。今後はこれらの観光戦略の用益が誰に対してどのようにもたらされるのかを明確にすることを課題とし、これからも青森ねぶた祭をさらに盛り上げるために研究を続けていきたい。

	青森ねぶた祭	京都祇園祭	田名部祭り
客数	2位（約280万人）	1位（約5000万人）	3位（約9万人）
観光戦略の充実度	2位	1位	3位
盛り上がり度	1位	3位	2位
住民の参加度	1位	3位	1位
楽しさ	1位	3位	1位

感想

竹谷　雅

今回の調査は普段見ることのない他の地域の祭りを見て、地元の人の話を聞くことができ、とても貴重な体験をすることができた。また、他の地域に出て青森の魅力を改めて知る機会ともなった。これからは、より一層青森を盛り上げられるように更に具体的に考察していきたい。

櫛引星希

京都祇園祭の調査では、突然の大雨や猛烈な暑さに見舞われ、体調の心配もあったが無事に調査を終えることができた。実際に現地に行って調査を行うことで、字面だけでは伝わらない祭りの雰囲気や祭りに携わる人々の表情や想いなど、多くの情報を得ることができた。今後も各地の祭りの調査を行うと共に、青森ねぶた祭のさらなる活性化に貢献できるよう活動をしていきたい。

鈴木玲奈

今回携わった京都祇園祭の調査は、わからないことだらけで１からスタートした調査で不安もあったが、無事祭礼比較を計画通りに進めることができたと同時に学ぶことが多かった。今後も調査を続け、「祭り」というもの魅力を発信し、より内容の濃い調査ができるよう努めたい。